

# フルートとピアノのためのソナタ F.プーランク

Sonata for Flute and Piano  
Francis Poulenc

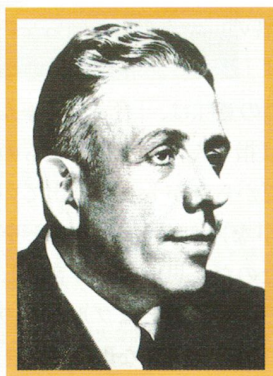
◆◆ 第1回

講師・有田正広



有田正広（ありた まさひろ）  
昭和音楽大学教授  
桐朋学園大学古楽器科講師

今回からはフルートのレパートリーの中で最も重要な作品の一つと言える、プーランクの「フルートとピアノのためのソナタ」を取り上げます。19世紀後半から20世紀に作られた様々なフルートの名曲—フォーレのファンタジー、プロコフィエフのソナタ、ゴッセルのソナタなど—を、例えば「フルート・ソナタ」と言うように、フルートのための「独奏曲」と片付けてしまうのは賛成できません。これらの作品の多くは、フルートとピアノがお互いに対話をするように、2つの楽器が対



フランシス・プーランク  
(1899-1963)



ジャン・コクトーと六人組  
前列左より オネゲル、コクトー、ミヨー  
後列左より プーランク、タイユフェール、オーリック、デュレ

等に美しく音楽的にからむように書かれているからです。このプーランクの「ソナタ」もその例にもれず、フルートとピアノのためのソナタと考えて、フルートの独奏曲という考えを持ち込まない方がいいと思います。

プーランクは1899年に生まれましたが、若い頃にジャン・コクトーらによって提唱された芸術運動に賛同し、1920年に「フランスの六人組」というグループを結成しました。この6人とは、フランシス・プーランク、ジュールメヌ・タイユフェール、ダリウス・ミヨー、アルテュール・オネゲル、ジョルジュ・オーリック、ルイ・デュレで、いずれもフランス人またはフランス語を母国語に持つ人たちです。コクトーが文壇で様々な論評を繰り広げていた、伝統的、歴史的な習慣というものから新しいものへと移行するその原動力を自らの内側や大衆性に求めたのと同様に、「六人組」の音楽家たちも過去の伝統的な音楽の呪縛から逃れという動きを持っていました。コクトー自身はそれ以前にも、例えばエリック・サティや若いピカ

ソといった、今では歴史に残るような大芸術家たちによって、一つの総合芸術あるいは統合芸術ともいうべきものを打ちたてようとしたことがあり、その流れの中で「六人組」も結成されたのです。

この時代のフランス人にとって大きな存在であったクロード・ドビュッシーの音楽が、彼らにとって大変誇るべき音楽であったと同時に、その影響力が呪縛となってそこから逃れることが難しく、ドイツのワーグナーの音楽運動もフランスに大きな影を落としていた中で、コクトーの提唱するような大衆性、娯楽性、一般性というような、高尚な芸術とは対極をなすような芸術を打ちたてようとする動きは、この時代の一つの合言葉のようになっていました。美術の世界でも、先程の若いピカソが後のキュビズムの原動力となったり、マルセル・ドゥシャンといった、伝統的な美意識を根底から覆し改革しようとする人々が1920年前後に数多く出てきています。もちろんこうした動きはアル・ヌヴォーの、あるいは印象派とよばれるような19世紀末からのベ

ル・エポックの土台があったからなのでしょうが、彼らの音楽理念は、そうした所に活路を見出そうとしたのかも知れません。「六人組」の活動は1921年に彼らの共作として「エツフェル塔の花婿花嫁」に結実します。その存在はその後すぐに忘れられ、6人揃っての活動は一回限りとなってしまいましたが、プーランクは生涯そうした音楽理念を自らの作品に反映させ、小オペラの「マスク」、ピアノのための物語付きの小品「小象のパパール」など、音楽を映像化したり、解りやすい音楽を書いたり、社会の風刺などをその音の中に求めたりしていました。

この「ソナタ」は1957年にクーリッジ財団のエリザベス・スプラグ・クーリッジの追悼のために書かれた作品です。この曲には大きな問題があり、それはプーランクが書き下ろした版と、初演を行った後の書き直しの版の2つが存在するという事です。プーランクはこの曲を1957年にストラスブール音楽祭で若き日のジャン＝ピエール・ランバルと初演しましたが、その際おそらくランバルから様々な演奏上の指摘を受け、その後様々な箇所について作品を書き換えることとなります。プーランクの楽譜を終始一貫して出版していたイギリスのCHESTER社は1958年にこの曲の初版を出しましたが、同社は1994年に全面改訂を行い、現在ではランバルと初演を行う以前の初稿を定本とした楽譜になっています。この両者の間の大きな違いとしては、例えば、第1楽章が1994年版では“Allegretto malincolico”と書いてあるのに対して、

1958年の初版では“Allegro malincolico”となっています。この“malincolico”あるいは“malinconico”は「メランコリー」「陰鬱な」という意味ですが、こうしたスペルの違い、そしてテンポの違い、音の違いも若干あり、さらにアーティキュレーション、強弱の違いもあります。

私事ですが、1973年から78年に私がオランダ、ベルギーに留学していた時に、オランダの名フルーティスト、フランス・フェスターのレッスンに通っていました。そこで、プーランクのソナタの初稿以前の自筆譜について面白い話と貴重な資料を見聞きました。まず、先程述べた初稿とランバルとの改訂版以前に、プーランクは1952年に友人に手紙で「今フルートのためのソナタの構想を練っている」と書き送ったように、早い段階でソナタのスケッチを書いており、それをフェスター氏が持っていたのです。これは演奏には直接関係ありませんが、例えば第3楽章は、これはピッコロで吹いた方が良くはないかと思うくらい高い音で書かれていますが、スケッチでは指の難しい高い音など、ほとんどはオクターヴ下で書かれていましたし、第1楽章の練習番号④の後で出てくる、ダブル・タンギングで行われる同音反復は、32分音符ではなく16分音符で書かれていたといった違いがありました。それが現在のようになったこととなります。

この作品の大きな特徴の一つとして、クーリッジの奥さんの思い出のために書かれたということもあってか、第1楽章に“malincolico”(メランコリー)という言葉がありますが、この「メランコリー」の表現について、プーランクはバロックからの伝統的なフィグーラを見事に20世紀の半ばに復活させています。これは実際の演奏法に入ってから詳しく説明しますが、さらに第2楽章は“Cantilena”で、これは「哀歌」です。第1楽章、第2楽章とも

陰鬱な気分を持った曲であるのに対して、第3楽章は“Presto giocoso”で書かれていて、悲しさを吹き飛ばすような快活な音楽になっています。このソナタをプーランクは、彼ならではの易しく理解できる解りやすい音楽であると同時に、クーリッジの亡き夫人を優しく思い出させるような、ちょっとセンチメンタルでメランコリックな情感を持たせて、我々に親しみ深い作品に仕上げています。

演奏については次号以降で少しずつ触れていきますが、幸いなことに我々はプーランク自身のピアノ、ジャン＝ピエール・ランバルのフルートという初演と同じ演奏を今でもCDで聴くことができます。そのCDを聴くと、この譜面とは異なる演奏がされているわけで、違った表情が聴こえてきたりもしますが、おそらく演奏の現場での2人の呼吸が自然とそのような表現をさせたのだと思います。次回からはこの演奏も含めて、この作品をどう捉えるかという方法を考えていきたいと思えます。



若き日の  
ジャン＝ピエール・ランバル



初演の翌年の1958年パリで録音されたランバルとプーランクによる「ソナタ」のCD。(現在は廉価盤となりこの表紙ではない)



1994年版



1958年版  
(第16版, 1992年)